

「ハイム一号棟の建設記録に寄せて」

この写真は、ハイムを実邸として場外に持ち出した記念すべき一号棟の建設記録です。実は、この前に奈良工場内での試作棟があるのですが、始めての実邸となると、いろいろとゲリラ的な戦術を画策した思い出があります。まずは人目に着かない建設場所選び、そこに至る運搬ルートの探索や運搬手段のクリア等々。何しろ道路事情一つとってみても、未整備時代でのこと。今なら、何でそんなことが？というような心配の種が一杯だったものです。

無事に完工後、いろいろな方々に見て頂きましたが、今も忘れられないきつい一言に「素人集団が造りあげた壮大な違法建築物」という批評がありました。これには、「よくぞここまで既成概念を捨てることができたものだ。」という感嘆の意味と、その裏に「どうやって、確認申請をおろすつもりなの？」という同情の意味が込められていたと思うのです。クリア出来ないであろうと指摘されたポイントは、施工令68条2項「ボルト孔は、ボルト径より1mmを越えて大きくしてはならない」という条文。コンクリート基礎の埋込ボルトとユニットの締結孔の対角寸法を一万分の一精度で出せるのか？という点です。よくしたもので、これを救ってくれたのは工業化住宅コンペへの応募でした。コンペ参加により専門有識者の審査を受けたことで、いわゆる38条認定「予想しない工法の建築物については、建設大臣が同等以上の効力を認めれば規定を摘要しない」ことになり、成功への道を歩み出すことになったのでした。まさに案ずるより生むが易しということでしょう。

この建物を建てるに至るまで、セキスイハイム黎明期ともいうべき時代を私なりに思い出してみたいと思います。

昭和40年代前半、京都商品研究所にいた私たち所員は、会社の減資問題なども絡んで良いテーマがないものかとハングリーな状態であったと思います。当時、購読していた雑誌の中に「造」という進歩的な建築誌があり、ここで毎号のごとく東大建築科 大野勝彦という署名入りで掲載される報文に注目していました。ある人を介して、まだ大学生であった大野勝彦さんに会い、セキスイ入社を持ちかけましたが、彼はサラリーマンになる気は皆無。諦めきれずに、顧問という形でも…ということで、諸先輩方の尽力を仰ぎながら本社人事課、文書課などを巡り「顧問というのは、功成り名を遂げた人になるものだ」との正論を説き伏せることに成功したのでした。彼の参画で始めた開発テーマは、当時の積水化学では安全パイというべき設備ユニットレベルの議論。やがて、住宅の建設工事で最も手間のかかる水まわりスペースを工場内でユニットとして造れるなら、居住スペースも同時に…というハイリスクな議論展開になっていったのは必然の成り行きだったのです。そういった経緯から、当時一世を風靡した住宅産業論の大きなうねりにも乗って、ハイムが船出をすることになります。社長室にいた宮川和洋さんの肝いりで新規事業推進本部という組織が立ち上がり、そこに各工場から人材が集められました。集まってきた最初のメン

バーは、「辞令を貰ってやっては来たけど、俺たちは一体何をするの？」といった状態でした。まさしく、ゼロからのスタートで奈良工場内試作、この写真の実邸試作、続いて東京晴海グッドリビングショーでの二階建て出品へと突き進むことになります。連日、21時が終業定時の状態で作図に没頭するメンバーの仕事ぶりを見ていた大野先生が、設計作業の進め方の相違に驚嘆されたことがあります。つまり、建築では大枠の作図をあげてからだんだんとディテールの部品設計に手をつけるものだけど、ここでのやり方は、いきなり部品図を書き始めている。頭の中に書いてない組立完成図があって設計作業がどんどん進むとは、なんと頭のいい未建築屋集団だなア というものでした。セキスイハイムは、今で言うところの建築と機械のコラボレーションの産物ということなのではないでしょうか？

本写真の実邸試作でスタートしたハイム事業は、決して楽々と離陸した訳ではありません。若い技術者グループのやる気を殺がないように、暖かく見守って頂いた多くの諸先輩方のご理解、ご尽力の賜物であったことを忘れてはなりません。特に、カネ食い虫と言われ続けた初期においては、故柴田社長や故直原常務には幾多の内部的な批判・軋轢に耐える役割を担って頂きました。また、武蔵工場長時代の故西沢社長には、未だ海のモノとも山のモノとも判らないハイムの生産拠点を快く引き受けて頂き、一同涙したものです。秋山司郎さんは、中原利雄さんが率いるユニット開発チームと私の設備開発チームを絶妙のバランスでリードされて大きな存在感を示されましたし、高田哲郎元取締役は企画・販売面でハイム事業の推進役を見事に果たされました。

この建物が私の私有地に建てられたという経緯から、記録写真が私の手元に残っていたものと思います。現物は元の場所で朽ち果てておりますが、40年前に手掛けた思い出深い仕事の記録が貴重資料として長く保存頂けるなら、喜んで提供させて頂きたいと思う次第です。

平成17年1月

盛田 静雄